経済理論の客観性（４）

佐藤　順一

第四節　古典力学

（２）　論理世界

第四節全体を通して、私は古典力学の論理世界を探究している。その探求を進めるにあたっては、古典力学の理論構築者が遂行する理論構築作業を次の四段階に分けている。その第一段階で理論構築者が行なう作業は、日常世界の中から古典力学の理論素材を発見し、選択する作業である。この理論素材を理論構築者が意味の明確に確定した言葉で表現して現象世界を形成する段階が、理論構築の第二段階となる。意味内容が明確でしかも確定している言葉で表現することが概念化の基本的な内容であるとすれば、第二段階を概念化の段階と位置付けることができる。理論構築者は、理論素材を指し示す概念から理論構築に不要な要素を排除しあるいは必要な要素を取り出して理論構築の対象を絞り込み、分析世界を形成する。これが理論構築の第三段階である。第四段階では、理論構築者は、分析世界を構成する概念を論理的に操作して、論理整合的な理論を構築し、他の日常生活者に提示する。

第四節の(1)では、私は主に理論構築の第一段階を扱った。そこでは、古典力学の理論構築者が行なう理論素材の選択作業に密着することを通して、選択された理論素材の性質に関する若干の問題を追究した。その結果として、古典力学の理論素材は、日常世界の内部に存在するがゆえに現実的存在であり、日常生活とは独立にそれゆえ日常生活者の個人的思念とも独立にその意味で日常生活の外部に存在するがゆえに客観的で普遍的存在である、という判断を導き出した。

第四節の(2)では、この判断を踏まえて、理論構築の第二段階を中心に議論を進める。私が本稿で究極の課題としているのは経済理論の論理世界を探究することであり、第四節はその手掛かりを追究することを狙いとしている。ところが、古典力学における理論構築の第四段階は古典力学の理論を構築する作業そのものにほかならない。そこで、第四節では理論構築の第四段階を取り上げない。また、分析世界の在り方は構築される理論の性質にも依存する。この点を考慮に入れて、理論構築の第三段階についても、経済理論の論理世界のあり方と直接かかわる論点を念頭において、分析世界の一般的性質を説明するにとどめる。第四節の議論は古典力学の論理世界を受け入れることが経済理論の論理世界に困難をもたらすことを示唆している。この困難は第五節で取り上げる。

今回の議論も私が行なった思考実験の方法と結果の中間報告となる。私の思考実験が試行錯誤の過程を歩んでいることもあり、第四節の(2)には第四節(1)の議論や判断とは整合性がとれない言明が含まれているかもしれない。そうであれば、私は両者を論理的に首尾一貫したものに整え

る作業を行なう義務を負っていることになる。しかし、その作業は機会を改めて試みることとして、今回はわき目も振らずに思考実験を継続していく。

私が描いた図柄では、理論構築の第一段階では、古典力学の理論構築者は自身の日常世界で生じる事象の中から自らの問題関心に従って理論構築の素材を選択した。第二段階に至って、理論構築者は、選択した理論素材を内容が明確で誤解されることのないしかも確定した言葉で表現することによって、現象世界を形成する。理論構築の第二段階は理論素材を言い表わす概念で現象世界を構成する段階である、と言ってもよい。

しかし、第四節(1)で説明したように、理論構築者は理論素材を選択する作業を進める中で実際には区分作業を行っていた。区分作業は、五感を通して把握した事象を言葉で表現し、その内容を明確化する作業を伴う。明らかに、区分作業は概念化の第一歩である。概念化が理論構築の第一段階で既に始まっていたにもかかわらず、私は、理論構築の第一段階で行われていた区分作業を通して推進される概念化の過程を無視し、概念化に関する議論を理論構築の第二段階にまで持ち越した。このやり方は、概念化が本来は理論素材の選択過程と密接に関連していることを無視して、概念化の帰結だけを理論構築の第二段階として独立させている。これでは、理論構築の第一段階で私が行なった議論は、理論構築の第二段階で私が説明する概念化を前提としているという意味では、ある種の論点先取となりかねない。

この批判にもかかわらず、理論構築の第一段階と第二段階を分離することにも利点はある。私のやり方の下では、第一段階においては選択された理論素材の性質が専ら問われていた。一方、第二段階の議論では選択された理論素材を概念で表現することにかかわる諸問題に関心を集中させることができる。その結果、理論構築作業の出発点である日常世界と概念で表現され構成された世界とを直接突き合せて議論することが可能となる。以下では、概念で表現され構成された世界を概念世界と呼んでおく。

理論素材の選択と概念化とを一旦分離することを通して、ほかならぬ概念化が概念化の出発点である日常世界と到達点である概念世界との間に裂け目を引き起こすことを明確に理解することができる。だからこそ、古典力学の現象世界がその身に帯びることになる性質や問題点を鮮明に把握することが可能となる。このように私は期待している。また、前回の議論では現象世界と古典力学の日常世界という二つの概念世界の関係は不明確なままであった。概念の問題に焦点をあてている今回の議論では、この関係にも迫ることができる。

以下では、日常生活を送る中で形成されながらいまだ概念を用いて把握されていない日常世界を、私は原日常世界と名付けておく。原日常世界の基本的性質は既に第二節で説明した日常世界と異なるところはない。ただ、概念化以前であることを強調するために、ここではあえて原日常世界と呼ぶことにしたにすぎない。したがって、概念化以前であることを改めて断る必要がないと判断した場合などには、日常世界という言葉を使用することもある。

理論構築者が形成した原日常世界は多様な事象で構成されている。しかも、その事象は曖昧さをもっている。理論構築者は、少なくとも問題関心にかかわる範囲については、五感を通して知ることになった多様で曖昧な事象の内容を鮮明に把握したうえで、自身の問題関心に相応しい事

象とそうではない事象とをまずは分離しなければならない。この区分作業には理論素材を表現する言葉の問題が隠されている。

理論構築者が区分作業を遂行するためには、原日常世界で生じている事象を言葉を通して把握する必要がある。理論構築者は、理論構築作業を開始する時点では確定した概念をもっているわけではないはずだから、少なくとも理論構築の第一段階における最初の時点では、原日常世界で生じている事象を日常生活で使用されている日常語を利用して言い表わすほかはない。日常語は、日常生活の中で行われる会話を始めとするさまざまな情報伝達に使用されている。したがって、少なからぬ日常語は、少なくともある程度は確定した意味をもち、その意味は多くの人に共有されている。

それにもかかわらず、日常語の意味は使用される状況の中で変化する。場所が変われば日常生活の状況は相違する。また時とともに日常生活の状況は変わる。しかも日常生活で生じる事象の受け止め方は日常生活者によっても違う。日常語の意味は、少なくとも部分的には、状況の変化に応じて異なったものとなり、日常生活者によっても相違することになる。こうして、日常語には意味の不確定性と個人性がまとわりついてくる。それゆえ、日常語をそのまま用いたのでは、日常世界で生起する個々の事象を余すところなく正確に表現し、他者に伝達することはできない。

個々の事象の内容を鮮明に把握する作業は、その事象を指し示す日常語の意味を明確にし、確定していく作業として現れてくる。理論構築者が区分作業を行なう中で日常語が鍛えられ、概念が形成されていく、と言うこともできるだろう。古典力学の理論素材は日常生活における状況からも状況を受け止める個人的思念からも独立に存在している。このように考える古典力学の理論構築者は、日常語の意味を明確にし、確定していくためには、日常生活における状況と状況を受け止める個人的思念のいずれからも独立な言葉に日常語を改変していかなければならない。

日常語の意味を明確にし、確定することにつながる区分作業は、少なくとも古典力学の場合には、状況の違いに伴う意味の相違および異なった個人的思念の下で付与される意味の相違、この二つの相違を日常語から排除する作業となる。この作業が生み出す言葉は、日常生活者が日常生活で直面する状況には左右されないのだから確定した意味をもち、同時に個人的思念を排除しているが故に万人に共有されうる。この種の言葉をここでは学術語と呼ぶことにする。日常生活の中で使用されていた日常語は、理論構築者が区分作業を進める中で、万人に共通で意味が明確に確定している学術語に変身したのである。

もちろん、理論構築者が区分作業を行なう中では、鍛え直された日常語とは別の言葉が新たに創出される可能性もある。特に、日常生活の中では見えていなかった事象が理論構築の途上で浮き上がってきたときには、その事象を指し示す新しい学術語が作られることになるだろう。新たに作られた学術語は、日常生活の中に取り込まれ、新たな日常語として登場することすらあるかもしれない。この場合には、日常語から学術語への変身とは逆に、学術語から日常語への変身が生じるのである。

このように日常語と学術語の関係は存外に複雑であるのは事実である。したがって、一般的に

言えば、日常語と日常世界の関係および学術語と現象世界の関係さらには二つの関係の関係についても論じるべきではあるのだろう。しかし、私は日常語と学術語の込み入った関係についてここで議論するつもりはない。何よりも、理論構築者は、理論素材を選択する段階で行う区分作業が概念化と取り結ぶ一般的関係を論理的に明らかにしたうえで、理論素材を選択する作業に取り掛るわけではない、と思うからである。さらに、理論構築者は日常語と学術語の関係を解析した後に学術語を使用して理論素材を表現しているわけでもないからである。それに加えて、私の関心が向いている方向は、概念を用いて言い表わされる以前の原日常世界から概念を用いて表現される現象世界が形成される過程と帰結にあるからである。以上の三点を考慮して、私は、区分作業は日常語の意味を明確にするという形で日常語を鍛え直すことから始まり日常語の概念化を実現した地点に理論構築者を到達させることになる、と言うに止めておく。以下では、日常語が学術語に変身する事態を前提にして、古典力学の現象世界が帯びている性質に関する議論を進める。

古典力学の理論素材は、日常生活者としての古典力学の理論構築者が直面する日常生活の変化とは独立に存在している。また、日常生活者である理論構築者が日常生活を送る中で身にまとう個人的思念とも独立に存在している。前回論じたように、この二つの条件が存在するがゆえに古典力学の理論素材は客観的で普遍的であった。その理論素材を指し示す概念で構成されている古典力学の現象世界も客観的かつ普遍的世界である。いうまでもなく、古典力学の現象世界を構成する概念が指し示す理論素材は、理論構築者が形成する原日常世界の中から選択されている。したがって、原日常世界こそが現実であるとすれば、古典力学の現象世界は現実的世界である。

もちろん、古典力学の理論構築者は、少なくとも理論構築の第二段階では、古典力学の現象世界が現実的で客観的かつ普遍的世界であることを、誰もが納得できる形で論理的に証明したわけではない。しかし、理論構築者は、自分の判断は正しい、と確信しているだろう。この確信の下に、古典力学の理論構築者は、誰でもが承認するという意味で普遍的な世界として古典力学の現象世界を他の日常生活者に提示する。しかも、理論構築者は、万人の承認を得られるものと確信して、理論構築作業を進めていく。

言うまでもなく、全ての日常生活者は日常生活を送る中でそれぞれの原日常世界を形成している。それらの原日常世界が全く同一であることはありえないとしても、古典力学の理論構築者が理論素材として提示した事象がそれぞれの原日常世界の中にそれぞれの日常生活とは独立に存在している。理論構築者は、このように確信しているからこそ、全ての日常生活者は古典力学の現象世界が現実的で客観的かつ普遍的世界であることを承認するはずであると信じているのだろう。

確かに、日常生活者は日常生活の中で五感を通して事象を把握している。自身の原日常世界の中に古典力学の理論素材となる事象が存在している場合には、理論構築者以外の日常生活者にとっても古典力学の理論素材となる事象は現実に存在する事象として現れる。そのうえ、五感を通して知ったこの事象は日常生活が変化しても変わらずに存在しており、日常生活の中で自らが抱く個人的思念とも無関係に存在していること、これらの条件を全ての日常生活者が日常生活の

中で認めることができるなら、古典力学の理論素材を指し示す概念で構成された現象世界は現実的で客観的かつ普遍的世界であることを全ての日常生活者は承認するかもしれない。

しかし、この事態は一つの可能性であるにすぎない。古典力学の理論構築者が提示した現象世界に対して理論構築者以外の日常生活者が示す反応には別の可能性も存在する。それにもかかわらず、理論構築者以外の日常生活者が理論構築者の期待通りの反応を示す可能性だけを前提として議論を進めてしまったのでは、理論構築者が直面している困難を見逃してしまうことになる、と私は恐れる。そこで私は、理論構築者以外の日常生活者が理論構築者の期待とは全く異なる反応を示すかもしれないこと、その場合には理論構築者はその日常生活者を説得する作業をなすべきであること、この二点を敢えて想定してみることにした。

古典力学の理論構築者が現象世界を提示した相手である日常生活者は、古典力学の理論構築作業を行なっておらず、理論構築者が構成した現象世界をただ受け取るにすぎない。私はこのように設定した日常生活者を非構築者と呼んでおく。非構築者は、古典力学の理論素材が自身の原日常世界の中に日常生活とは独立に存在するとは思ってもいないかもしれない。この非構築者は、古典力学の現象世界が現実的で客観的かつ普遍的世界であるとする判断に疑念を抱く可能性がある。

理論構築者は非構築者のこの疑念を払拭しなければならない。しかし、理論構築の第二段階では、理論構築者は論理を通して自身の判断を正当化することはできない。とすれば、非構築者を説得するためには、理論構築者は非構築者の日常生活や原日常世界に着目しなければならないだろう。しかし、私の判断では、理論構築者と非構築者とでは原日常世界と現象世界の関係に相違がある。この相違があるからこそ、理論構築者が非構築者を説得する作業は極めて困難な作業となる。

そこで、この問題を追究するための第一歩として、日常生活および原日常世界と現象世界との関係を極めて一般的な形ながら改めて確認しておこう。原日常世界は、日常生活者が日常生活を送る中で形成した世界であり、日常生活者が明確で確定した意味をもつ概念を用いて把握し表現する以前の世界である。原日常世界の中で生起する事象の内容は漠然としており、状況が変わればその意味は変化する。また、日常生活者は日常生活の中でそれぞれに異なった事象に直面している。しかも、個人的思念にも相違があり、直面する事象から受取る印象も日常生活者によって異なる。それゆえ、日常生活者はそれぞれ異なった原日常世界を形成する。

他方、理論構築者は、自身の原日常世界を構成する事象の中から選択した理論素材を概念化することを通して現象世界を形成する。現象世界は、意味が明確で確定した学術語で表現されている。このことは、第一にその言葉が指し示す事象の内容、第二にその言葉が指し示す事象に含まれる事象と含まれない事象の境界、この二点を同時に確定することを意味している。また、現象世界で生起する事象に対する個人的思念は排除されている。現象世界は意味が明確で確定された言葉で表現された世界であり、日常生活者全員に共通の世界である。

私の理解が誤りでないならば、古典力学の現象世界は、意味が明確で確定された、しかも万人に共通な概念で構成されている世界であるから、意味の不確定性と個人性を有する原日常世界と

は正反対の性質をもつ世界として日常生活の中に現れてくる。したがって、現象世界は原日常世界とは断絶した別世界のようにみえる。一方では、現象世界は、原日常世界から掬い取られた理論素材を指し示す概念で構成された世界であるから、原日常世界なくしては存在しえない世界である。もちろん、概念化は原日常世界を消滅させるわけではない。それゆえ、現象世界を形成した理論構築者が送る日常生活の中では原日常世界と現象世界とは並存している。しかも、理論構築者の目線に沿って言えば、現象世界は、理論構築者が自身の原日常世界から出発して形成した世界であるから、理論構築者の原日常世界と接続している。概念化は、原日常世界と現象世界の間に断絶を生み出す一方で、両者の連続性を確保してもいる。概念化が原日常世界と現象世界の間に断絶面と連続面をともにもたらすこの事態を、私は概念化が生み出す裂け目と表現しておく。

日常生活者は自他の原日常世界を少なくとも完全には知ることができない。この一般的な事情に加えて、概念化が生み出す裂け目の下で直面することになる二つの事情が存在する。第一に、理論構築者と非構築者はともに相手の原日常世界が見えていない。しかも、第二に、現象世界と自身の原日常世界との間に取り結ばれる関係は、理論構築者と非構築者とでは大きく異なっている。この二つの事情が織りなす状況を簡単にまとめれば、次のようになる。理論構築者は、非構築者の原日常世界を視野の外において、専ら自身の原日常世界に目を向けて現象世界を形成する。他方、非構築者は、理論構築者の原日常世界を知らされないまま、自身の原日常世界の中に理論構築者が構成した現象世界を抱え込む。この二つの事態が存在するからこそ、理論構築者が非構築者を説得することは困難なのである。

理論構築者は、非構築者の原日常世界を無視したまま、自身の原日常世界から現象世界を掬い取る作業を遂行し、現象世界を形成する。作業の出発点と到達点は連続した一連の作業過程の両端に位置するから、理論構築者は自身の原日常世界と現象世界を連続した関係にあるものと意識するだろう。しかし、理論構築者は学術語で表現された現象世界に目を向けているため、ひとたび現象世界が形成された後では自身の原日常世界と現象世界の断絶面は視野の底に沈み、自身の原日常世界は闇に溶け込んで見えなくなってしまう。理論構築者が現象世界を非構築者に伝達する際には、理論構築者の原日常世界も非構築者の原日常世界も消え去っている。理論構築者は非構築者に対して現象世界をあたかも自身の作業から自立した世界であるかのように提示することになる。

理論構築者が提示した現象世界は、理論構築者が自身の問題関心に従って自身の原日常世界から掬い取った世界であるにもかかわらず、理論構築者の作業からは自立した世界として非構築者に提示される。理論構築者の日常生活や原日常世界あるいは問題関心だけではなく、理論構築者が現象世界を形成する作業過程も、非構築者には隠されたままである。そのうえ、非構築者は、非構築者自身が抱く問題関心や自身が形成した原日常世界からも独立した世界として現象世界を突きつけられている。理論構築者が突きつけた現象世界を、非構築者は、自身の原日常世界に外部から飛び込んできた異質な世界として受け止めるほかはない。

非構築者の原日常世界に飛び込んできた古典力学の現象世界が現実的で客観的かつ普遍的世界

であることを、古典力学の理論構築者自身は確信しているに違いない。しかし、少なくとも理論構築の第二段階では、理論構築者が下した判断が正当であることは、論理的に証明されているわけでも、事実として万人によって共通に承認されているわけでもない。非構築者は、理論構築者の判断が正しいとする根拠を直接には何も与えられていない。この条件の下では、非構築者は現象世界を理論構築者が抱くモノの見方が生み出した一つの仮説として受け止めるのが、せいぜいのところかもしれない。

しかし、現象世界が一つの仮説であることを認めることから議論を始めてしまったのでは、原日常世界から現象世界を経て理論構築に至る途中の過程には論理世界が存在することが見逃されてしまう、と私は思う。この事態は論理世界の探究を進めたい私には不都合な成り行きである。そこで、私は、現象世界を仮説とみなす考え方から差し当たりは離れて、理論構築者が非構築者を説得する方法を模索しているものと想定することを通して、現象世界の性質をなおも追究してみたい。この作業は、古典力学の現象世界と古典力学の日常世界は出自を異にする概念世界であることを示唆することになるだろう。

非構築者は自身の原日常世界に飛び込んできた異質な古典力学の現象世界を現実的で客観的かつ普遍的世界とは認めない。この事態から私は出発してみる。理論構築者が自身の判断を非構築者に受け入れてもらおうとするときに最初に直面する困難は、非構築者が理論構築者の提示する現象世界を現実的世界であるとは認めない、という状況である。現象世界が現実的世界でないならば、その客観性や普遍性には関心が払われないに違いない。しかし、仮に非構築者が現象世界の現実性を承認するに至ったとしても、現象世界の客観性と普遍性を認めない可能性は残される。そこで、私は、非構築者が現象世界の現実性に対して懐疑の念を抱くかもしれない状況を最初に取り上げ、次いで客観性と普遍性の問題を扱う。

日常生活者にとっては自身の原日常世界こそが現実的世界である。この原則に照らせば、古典力学の現象世界が現実的世界であることを日常生活者である非構築者が承認するときは、現象世界を構成する概念が指し示す古典力学の理論素材が非構築者の原日常世界の中に確かに存在していることを非構築者自身が確認できるときである。もちろん、実際の世界に住む日常生活者は、理論構築者が理論素材として提示した事象を日常生活の中で五感を通して知ることで、理論素材が現実に存在していると直ちに判断してしまうかもしれない。しかし、論理世界の下では、非構築者は厄介な問題に直面せざるをえない。

第一に、ある事象を日常生活の中で五感を通して知ったとしても、それだけではその事象が実際の世界で確かに存在していることにはならない。非構築者の幻覚や思い違いの結果として、その事象が存在するかのように非構築者には見えた可能性を否定しきれないからである。理論構築者がこの可能性を打ち消す作業は理論構築の第四段階まで待たなければならないだろう。

第二に、五感を通して知った事象には個人的思念が付きまとう。他方、現象世界を構成する概念からは一切の個人的思念が排除されている。非構築者が日常生活の中で五感を通して知りえた事象と現象世界で生起すると知らされた事象との間に、非構築者は違いを見て取ることになる可能性が生まれる。その場合には、非構築者は、自身の原日常世界こそが現実であるのだから、古

典力学の現象世界で生起する事象は現実的存在ではないと判断することになるだろう。理論構築者には誤解と思えるこの判断を訂正するためには、理論構築者は、自身の個人的思念や原日常世界さらには自身の問題関心を開示し、区分作業のやり方を白日の下にさらすことが避けられないかもしれない。この作業自体は、古典力学の理論素材を指し示す概念によって構成される現象世界が自立的世界ではないことを暴露する作業になる。

これらの問題を無視したとしても、なお第三の困難が存在する。概念に対峙するのは概念にほかならない。そこで、非構築者が、現象世界を構成する概念が指し示す事象が現実に存在しているかどうかを判断するために、五感を通して知りえた事象を概念化することに踏み切ったとしてみよう。この場合でも、理論構築者と非構築者の間には、問題関心や区分作業のやり方に相違が存在しているかもしれない。そうだとすると、古典力学の現象世界を構成する概念が指し示す事象だけを対象として概念化したとしても、非構築者は、古典力学の現象世界を構成する概念とは違った概念を作り出し、理論構築者とは異なった概念世界を形成する可能性がある。

非構築者は、二つの概念世界に直面することになるから、古典力学の理論構築者が提示した理論素材を自身が形成した概念世界の中に改めて位置付け、二つの概念世界を比較することになるだろう。二つの概念世界を構成する概念がたとえ同じ言葉を使用して表現されていようとも、非構築者は、古典力学の理論構築者が提示した理論素材の意味や概念世界における位置付けは誤りである、と判断するに違いない。この非構築者には、自身が形成した概念世界こそが自身の原日常世界から掬い取った現実的世界であるのだから、古典力学の現象世界は非現実的世界に見える。この非構築者は、古典力学の現象世界を、客観的で普遍的世界であるどころか、古典力学の理論構築者が抱く特定のモノの見方が生み出した虚構の世界と評価するかもしれない。

古典力学の理論構築者は非構築者の誤解を解くべきである。理論構築者は、非構築者が古典力学の理論素材として提示された事象をいわば正しく概念化し、自身の概念世界を正しく形成することを手助けしなければならない。そのためには、理論構築者は、自身の原日常世界と問題関心および区分作業の方法を開示する必要がある。理論構築者が行なうべきこの作業は、古典力学の現象世界は自立した概念世界ではないことを自白する作業になる。

非構築者が仮に古典力学の現象世界が現実的世界であると認めたとしても、現象世界の客観性を直ちに承認するとは限らない。私の用語法に従えば、ある事象が客観的であることは日常生活とは独立にその事象が存在していることを意味する。この点に留意すれば、古典力学の理論素材が客観的存在であるかどうかという、いささか曖昧な問いを日常生活との関係で敢えて二つの問いに分けたほうがよさそうである。第一の問いは非構築者自身の日常生活との関係で、第二の問いは理論構築者の日常生活との関係で、それぞれ発せられる。

第一の問いは、古典力学の理論素材が非構築者の日常生活とは独立に存在していることを非構築者自身が認めるかどうかという問いである。非構築者が否と解答する場合には、理論構築者は、非構築者の原日常世界の中に存在する理論素材が非構築者の日常生活とは独立に存在していることを非構築者に承認してもらわなければならない。そのためには、理論構築者は非構築者の原日常世界と日常生活の両方を把握する必要がある。そのうえで、非構築者にそれらを提示し、

古典力学の理論素材が非構築者の日常生活とは独立に存在していることを明示しなければならない。

客観性に関する第二の問いは、古典力学の理論構築者が理論素材として提示した事象が理論構築者自身の日常生活と独立に存在していることを、非構築者が認めるかどうかという問いである。非構築者がこの問いに対して判断を下さなければならないとしたら、非構築者は理論構築者の原日常世界と日常生活を知る必要がある。古典力学の理論構築者は、現象世界を提示したときには隠していた自身の日常生活と原日常世界を非構築者に開示しなければならない。結局は、古典力学の理論構築者の提示した理論素材が客観的に存在していることを納得してもらう作業は現象世界が自立的に存在していることを否定する作業にもなる。

非構築者が、仮に現象世界の客観性を認めたとしても、その普遍性を直ちに承認することにはならない。普遍性には存在の普遍性と認知の普遍性という二つの側面がある。この点に着目すれば、普遍性に対する問いにも二つの問いが存在する。第一の問いは存在に関する問いであり、第二の問いは認知に関する問いである。しかし、古典力学の理論構築者は古典力学の理論素材が時空を超えて存在していることを、少なくとも理論構築の第二段階では、論理的に証明しているわけではない。したがって、この段階で非構築者が答えるべき普遍性に関する問いは、日常生活者が解答すべき問いになる。日常生活者はいつの時代にもどの社会にも存在する。この意味で時空を超えて存在する日常生活者が形成する原日常世界に古典力学の理論素材が存在するかどうかが問いの焦点となる。この問いは、いわば二段構えの問いになると考えるべきであるだろう。

普遍性に関する第一段階の問いは、時空を超えて存在する全日常生活者が形成するそれぞれの原日常世界の中に古典力学の理論素材が存在していることを、この問いの解答者が認めるかどうかという問いである。第二段階の問いは、時空を超えた全原日常世界の中に古典力学の理論素材が存在していることをそれぞれの日常生活者自身が認めていることを、この問いの解答者は承知しているかどうかという問いである。

個々の解答者は、自身の原日常世界の中に古典力学の理論素材が存在することを知っていたとしても、時空を超えて存在する他の全日常生活者が形成するそれぞれの原日常世界の中にもその理論素材が存在しているかどうかを知ることはできない。ましてや、時空を超えた全日常生活者がそれぞれの原日常世界の中に古典力学の理論素材が存在することを承知しているかどうかを判断することはできない。

普遍性に関する問いの解答者がこの問いに解答するためには、第一に時空を超えて存在する日常生活者が形成する全原日常世界を知り、第二に時空を超えた全日常生活者の判断を知る必要がある。日常生活者が原日常世界で生じる事象に関する判断は広く言えば個人的思念の領域に属する。したがって、古典力学の理論構築者は、自身の形成した現象世界が普遍的に認知されるべき世界であることを全ての非構築者に納得してもらうことが必要だと思うのであれば、時空を超えた全日常生活者の原日常世界と個人的思念を把握し、非構築者に開示しなければならない。

古典力学の現象世界の現実性と客観性および普遍性を巡る問題を丁寧に見ていけば、議論はさらに続くだろう。しかし、ここでは大筋だけを押さえておく。古典力学の理論構築者が、自身の

下した判断に対してさまざまな反応を示す非構築者の全てに自身の判断が妥当であることを納得してもらうため行なうべき最初の作業は、理論構築者自身を含め時空を超えた全日常生活者が送る日常生活とその中で生まれる個人的思念および原日常世界を正確に把握する作業である。

しかし、理論構築者自身は日常生活者であるから、時空を超えた全日常生活者の日常生活と個人的思念や原日常世界の全てを隅々まで正確に把握することはできない。必要ではあるが可能ではない。この行き詰まりを打開するためには、時空を超えた日常生活や個人的思念および原日常世界の全体をその外側から観察する視点が求められる。理論構築者は、観察者の存在を設定し、その観察結果として時空を超えて存在する日常生活者が送る日常生活や個人的思念および原日常世界を把握することになる。観察者は、日常生活の外側にそれも全てを見渡すことができる天空の高みに存在しており、時空を超えて日常生活や原日常世界および個人的思念を観察できる立場にいる。その観察者は、自身の日常生活をもたない代わりに、天空の高みから時空を超えた全日常生活者の日常生活を隅々まで正確に観察することができ、また個々の日常生活者が日常生活を送る中で形成した原日常世界や日常生活の中で生じる事象に対して抱く個人的思念をも余すところなく正確に把握することができる。このように想定される。

もちろん、観察者が観察結果を理論構築者に提供するまでの過程の中では、観察者なりの困難に直面する。第一に、観察者は原日常世界の曖昧さを乗り越えるという難題を解決しなければならない。私は、原日常世界を形成する日常生活者が見れば曖昧な事象も、観察者は曖昧さのない事象として観察することができるものと、差し当たりみなしておく。第二に、観察者は観察対象の範囲を時間と空間の両面で確定する必要がある。この点に関しては、理論構築者が現象世界を提示した時点で、その時点で存在する理論構築者と全非構築者とからなる全日常生活者の日常生活および原日常世界と個人的思念を対象として、観察者は観察する。このように私は想定しておく。

私の想定の下では、観察者は、然るべき時点でかつ必要な範囲で、全日常生活者の日常生活や原日常世界および個人的思念を余すところなくかつ正確に把握することができる。しかし、ここには第三の困難が待ち受けている。観察者は、原日常世界を観察することはできるが、その観察結果を観察したままの姿で理論構築者に提供できるわけではないのである。

日常生活者は、同じ社会の下でもそれぞれ異なった状況の下で生活を送っている。したがって、同じ社会の下で日常生活を送る日常生活者が形成する原日常世界を構成する事象の一部は互いに相違している。それゆえ、全日常生活者の原日常世界を構成する事象は、全原日常世界に共通の事象と特定の原日常世界に特有の事象とからなる。観察者は、全日常生活者の原日常世界を構成する全事象を観察し、その結果を全原日常世界に共通の事象と特定の原日常世界に特有の事象とに区分する必要がある。そのうえで、同一の性質をもつ事象を一つの事象としてまとめなければならない。観察者は、まとめられた事象から構成される原日常世界を全日常生活者に共通の原日常世界として理論構築者に提示することになる。提示された原日常世界を集合に見立てて単純化して言えば、観察者は全日常生活者が形成する原日常世界を構成する事象の和集合をもって観察された原日常世界と判断し、これを理論構築者に提示するのである。

観察者がそれなりの区分作業を行なったうえで理論構築者に提示する原日常世界は、もはや本来の原日常世界そのものの単純な総和ではなく、概念化された原日常世界とでも呼ぶべき世界である。以下では、用語上の混乱を避けるため、概念化された原日常世界を単に日常世界と呼んでおく。

観察者は全日常生活者の原日常世界を構成する全事象を対象として区分作業を行なっている。区分作業を行なうには目的が必要である。その目的は区分作業を行なう者が自身の問題関心に基づいて定める。ところが、観察者は日常生活者ではないので自身の原日常世界をもたない。それゆえ、特定の問題関心にしばられることはない。逆に言えば、観察者の関心は観察すること自体にあるのだから、日常世界をさらに再編成して整序する動機をもたない。観察者は、自身が観察した結果として得られた日常世界を理論構築者に提示して、作業を終わらせる。古典力学の理論構築者は、観察者から受取った日常世界が既に概念化されているのだから、自身の問題関心に従ってその日常世界を構成する概念を再編成することができる。古典力学の理論構築者が再編成して得られた日常世界の全体像を私は古典力学の日常世界と呼んでいる。

もちろん、実際の世界には観察者は存在しない。実際の世界では、理論構築者が観察者に期待した役割を理論構築者自身が果たすほかはない。理論構築者は、日常生活者でありながら日常生活を超越した観察者の役割をも実践し、日常生活者全体の日常世界を構成する必要がある。そのうえで、古典力学の理論構築者としてその日常世界を再編成して、古典力学の日常世界も構成してみせなければならない。

しかし、理論構築者は、実際の世界では日常生活者であるのだから、自他の原日常世界を構成している事象を余すところなくしかも正確に知ることはできない。したがって、観察者が観察した原日常世界の総体を構成している全事象を具体的に並べ立て、区分作業を行なうことは、理論構築者には不可能である。その理論構築者の作業を叙述しなければならない私も、実際の世界では観察者ではなく日常生活者であるから、理論構築者に期待されている作業を理論構築者に代わって遂行する能力をもってはいない。観察者が提示した日常世界や古典力学の日常世界は、思考の枠組みではありえても、内容を明示できないという意味では内容空疎な概念世界であるとも言える。

一方、古典力学の現象世界は古典力学の理論構築者が形成した原日常世界に直接の基礎をもっている。理論構築者は、実際の世界の中で自身の原日常世界を見据えながら自身の問題関心に従って区分作業を遂行し、自身の原日常世界の中から理論素材を選択する。問題関心が明確であれば、選択された理論素材の範囲も内容も明確になる。理論構築者が行なう区分作業を経て選択された理論素材は選択された時点で既に概念で言い表わされている。理論構築者はこの概念を用いて現象世界を構成する。この現象世界は、古典力学の日常世界とは異なって、明確な内容をもつ概念世界である。内容の明確な古典力学の現象世界は内容不明確な古典力学の日常世界の一部である。理論構築者が現象世界を構成する基礎となった自身の原日常世界は、観察者が観察対象とした原日常世界総体の一部だからである。

理論構築者が構成した概念世界と観察者が構成した概念世界の両者を観察者は観察することが

できる。観察者がまず目にするのは、全日常生活者が日常生活の中で形成する原日常世界の総体である。観察者はこの原日常世界の総体を構成する全事象を対象に区分作業を遂行し、原日常世界を概念化し、日常世界を構成した。理論構築者は、自身の問題関心に従って観察者が提示した日常世界を再編成し、古典力学の日常世界を形成した。観察者が概念化した日常世界を構成する全事象はその日常世界を再編成した古典力学の日常世界を構成する全事象と完全に一致しているはずである。古典力学の理論構築者は、観察者が概念化した日常世界を日常生活とは独立に存在する自然界とそれ以外の人間界に二分して、古典力学の日常世界を構成した。古典力学の理論構築者が自身の原日常世界から掬い取った現象世界はその自然界の一部を占めている。

古典力学の現象世界に焦点を当てて、これら概念世界の関係を整理すれば、三重の同心円を描くことができる。その同心円の最も外側には古典力学の日常世界を表す円が、その内側には自然界の円が、さらにその内側には現象世界の円が、それぞれ位置する。古典力学の日常世界を表す円は、観察者が観察した原日常世界の総体を概念化した日常世界の円と完全に重なっている。その点を考慮すれば、この三重の同心円全体を概念化される以前の原日常世界総体という海に浮かぶ島にも譬えることができるかもしれない。

理論構築者は現象世界を出発点として分析世界を形成する。これが理論構築の第三段階である。分析世界は現象世界と理論との橋渡しをする位置にあるから、分析世界の内容は構築される理論にも大きく影響される。私は第四節では古典力学の論理世界を探究しているが、私の関心は経済理論における論理世界の方向を向いている。そこで、本稿では、分析世界の一般的な性格に触れるにとどめ、その中で古典力学の分析世界が現実的で客観的かつ普遍的世界でありうることを確認しておく。

現象世界を構成する概念は多様な要素を含んでいる。構築したい理論を構築するためには、現象世界を構成する概念から不要な要素の全てを排除し、必要な要素だけを残しておかなければならない。理論構築の観点から概念を純化するとでも言えようか。分析世界は純化された概念で構成された概念世界なのである。現象世界を構成する概念を表現するのに用いられた用語を私は学術語と名付けておいた。これに対して、分析世界を構成する純化された概念を言い表わす言葉を専門語と呼んでおく。学術語が複数の専門分野で使用可能であるのに対して、専門語は特定の専門分野における理論を構築する目的で使用される。もちろん、理論構築者が他分野の専門語を自身の専門分野で使用する専門語として流用することも、また学術語として使用された言葉と同一の言葉を専門語として使用することも、ともにありうるだろう。

分析世界は現象世界と構築される理論の両者を仲介する位置にある。言い換えれば、古典力学の理論構築者は自身の原日常世界から直接に分析世界を構成するのではない。したがって、分析世界は理論構築者の原日常世界と直接向き合ってはいない。日常世界こそ現実であるのだとすれば、分析世界と現実との間には断絶があるように見える。実際に、分析世界を構成する事象を日常生活で生起する事象と直接比較すれば、分析世界が現実的世界であるとはとても思えない程、両者の差は大きい。しかし、構築される理論が現実的であるべきならば、分析世界も現実的世界であらねばならない。

古典力学における概念世界の関係を表す同心円を利用すれば、古典力学の分析世界が現実的世界でありうることを、少なくとも形式的には、簡単に説明することができる。分析世界は、現象世界を構成する概念から不要な要素を全て取り去り、必要な要素だけを残して構成されている。その意味では、分析世界は現象世界の一部なのである。先ほどの同心円の図柄の中では、古典力学の分析世界を示す円は古典力学の現象世界を表す円の内側に位置することになる。古典力学の現象世界が現実的で客観的かつ普遍的世界であるなら、古典力学の分析世界も現実的で客観的かつ普遍的世界となる。

もちろん、分析世界が現実的世界であっても、その現実性にはある種の脆弱性がある。分析世界は、理論構築者が現象世界を構成する概念を操作して純化した概念で構成された概念世界である。原日常世界の中から選択された理論素材を学術語で言い表わすこと、さらには学術語で表現された概念を専門語で表現し直すこと、二重に行なわれたこの概念操作の結果として分析世界は構成される。その意味では、分析世界は、原日常世界を直接の背景として形成された概念世界ではなく、理論構築者が特定の問題関心に従って概念を操作した結果として構成されるに至った概念世界である。

それゆえ、分析世界の妥当性は、何よりもまず分析世界を構成する概念間の関係が論理的に整合的であるかどうかに依存している。理論構築者は、形式的に整った分析世界を構成する概念を操作して、論理整合的な理論を構築する。したがって、分析世界を構成する概念間の整合性は何よりも構築される理論を念頭において評価されることになる。一方で分析世界と原日常世界との直接的関係は切断されているから、理論構築者が概念間の論理整合性に執着すれば、分析世界を形成するにあたって現実が軽視されることも生じうる。理論構築者が、現実から切り離されたまま、概念間の関係のみに関心を集中させて分析世界を構成したときには、その分析世界は三重の同心円から飛び出してしまいかねない。分析世界の暴走とでも呼べそうな事態が生じる余地がここには存在している。

古典力学の場合には、現象世界は現実的で客観的かつ普遍的世界であった。古典力学の理論構築者がその現象世界を構成する概念から不要な要素の全てを排除し、必要な要素だけを残すという手続きを守る限り、分析世界の暴走は生じない。この分析世界を構成する概念を操作して構築される理論が現実の世界に広く当てはまるとき、分析世界の暴走が生じていないこと、したがって現象世界が現実的で客観的かつ普遍的世界であること、この二点が同時に確認される。この確認が得られるまでは、現象世界も分析世界も構築された理論も差し当たりは仮説にとどまる。

第四節の狙いは、古典力学の論理世界を探究することを通して経済理論の論理世界を追究する手掛かりを獲得することにあった。確かに、古典力学の論理世界を探究するという観点から見れば、なおも多くの論点が残されたままである。また、私が取り上げた論点の中には論理的に十分に整序できていない論点もある。さらに、私の主張や判断の一部は曖昧さを抱えていることも事実である。それにもかかわらず経済理論の論理世界を追究する手掛かりを獲得するという私の狙いはそれなりに果たせている、と私は思う。私の判断では、古典力学の論理世界を規範として受け入れる限り、経済理論の理論素材は自然界には属さないから、経済理論の論理世界は現実的で

客観的かつ普遍的な世界ではない。第四節の思考実験はこのことを強く示唆している。経済理論の論理世界が孕んでいる問題については、次節で取り上げる。